

9月になった、夏が終わろうとしている。8月すぐのころ「暑い 夏って いつも こんなに暑かった か」とぼやいた「1週間も経てば 身体が慣れて 楽になる 半年前の 冬もそうだった あの寒さが慣れたものだ」と暑さにも寒さにもぼやきながら耐えたが、身体がだるい、何もできない、立っただけで汗が流れるというような日だった。不思議というか8月の中旬過ぎたあたりから時々涼しい風が吹く、シャワーの水が冷たく感じる、眠るときになにか一枚かけたいと感じるようになった。半月先の9月16日から展覧会が始まる、3月の展覧会から半年、「新しい絵を出そう」と思いつつ4月5月と時が過ぎ「もうひとつ いいやつが できないねえ」とぼやきつつ7月8月が過ぎた。7月8月ごろから「ちょっといいかな 感じるかな」というやつが2.3点表れだし、半月前の今「もっといいやつができたかな」とほくそえむやつまで表れた。「アトリエを離れたら アカン」が功を奏したようだ。オレの絵は時間をかけて一筆一筆というものではない、下図もない、構想もない、白いキャンバスに向かってすぐに絵の具を溶いている、絵の具とキャンバスを見つめて、筆が動く、次の絵の具は前の絵の具が乾いてから入れるようにしている。乾くのを待っていると、その時のこと、色を入れた感覚・感情というものが薄れてしまう、これは残念なんだけれども、乾いていないところに次の絵の具を入れると絵の具同士が混ざり合い、いいときもあるのだが、にごることが多い、色にごると絵が汚くなる、絵が重くなる、という理由でなるべく乾くのを待っている。乾くのを待っているだけなら、「外へでて なにかほかのことを すればいいのでは」と思われるかもしれないが未練たらしくも傍にいたい、見守ってほしいこれがいうところの「アトリエを離れたら アカン」なのです、自分に言い聞かせています。

葛の花を見つけた。何度か書いたが「真夏 くさっぱらで繁っている 葉の大きな」即座に「葛」植物の先生が答えてくれた。子供のころから気になっていた植物、「手入れがされていない野原で おおいにはばを利かせている「あの草はなんだろう」この歳に近くなるまで気にはなっていたがヒトに尋ね図鑑を調べるといことはしなかった、「あの元気 土手も木も覆ってしまう 繁殖力はすごい」と夏になると思っていた。「あれが 葛 だったのか」葛とは吉野で繁っているもの、材木のような根を砕き何度も濾して手間をかけ、まっ白な葛粉ができるということはTVの動画で見たことがある。あれだけ手間がかかるのなら高いのも仕方がない、「吉野葛は高級品だ」と思った。その高級品の吉野葛の原料がそこら辺りのくさっぱらにわがもの顔で繁っている草だとは、あれが葛だとは驚いた、モノを知らない自分にも驚いた。続きがまだある“カッコウトウ”という漢方薬がある、解熱や下痢に効くと書いてある、一般的によく聞く名前、その漢字が“葛根”とは、名前の通り葛の根から作られているらしいとこれもまた知らなかった。葛の花の話聞いたことがあった、あの旺盛なはっぱの中で先日見つけた、水路の横のフェンスに繁っている大きな葉の隙間に二輪咲いていた。葛の花は赤紫の花ビラが並び上のほうにしっぽがある、神秘的というかエキゾチックとかごく美しいというわけでもないが、昆虫とか爬虫類を連想させる古代の香りをたたえた不思議な花だ。つる性の葛、夏の真っ盛り土手にも山にもものすごい勢いで繁っている、木に群がって張りぼてのように形づくる、壁を覆いコンクリートが全く見えない、日本の気候に合っているのか見事に育っているが、世界の侵略的外来種ワースト100に入っているとか、繁茂・拡散の力がすごいそうだ。“世界の侵略的外来種ワースト100 これは動物、昆虫も含まれているが、ほとんどヒトがヒトの都合で移動させたものがほとんどのようだ。もともとの土地では自然に昔からヒトより以前から在った動植物が、よその土地、外国に行くと嫌われ「ヒトに害を及ぼす 生き物」に変身している。我々が食っている“ワカメ”もそうらしい。ワカメを食うのは日本・韓国だけだそうだ。「昔からあるものなのに 近年 どうして 世界に拡散した？」なぜだろうと思ったら、バラスト水といって貨物船がバランスを保つために海水を船倉に溜め各地の港に着いたところで、その水を吐き出すことでワカメの種も吐き出され世界に広がったらしい。

ところで葛を調べていて面白い話にいきあたった、「人権の話じゃないのかな」ということができたので紹介します。葛、吉野葛という食料品の“クズ”の語源が大和の国・吉野川の国栖(くず)という所が葛の産地だったことから吉野葛といわれるようになったと記してある。「国栖のヒトは 我々稲作農民とはずいぶん違う 山で暮らし 洞窟に住み 木の実 カエル 魚を食べる 歌舞音曲も上手い」と記されている。吉野の国栖、常陸の国茨城郡に住んでいた先住民“つちくも”“やつかはぎ”と興味を引く名前が出てくるがこの話はまたこんど。

何日前からか、ぐずぐず雨が降っている、こんなに雨の日が続くのも珍しい、梅雨の季節のようだ、洗濯物もからりと乾かない、毎日運動に出るので運動靴はいつも濡れている。わが住まいのこの近辺は“晴れの日”が多い、少し山のほうに行くと曇り空、小雨のときでもこのあたりに下ってくるといつも太陽が出ている。このあたりがはじめじめ湿気しているのなら、山のほうは毎日のように雨が降っているのではないだろうか。先日“山のほう”安威川の上流に行くとダム工事がどんどん進められている、大きな重機で山肌を削り整地をして道や土手を造っているが、考え方を考えれば自然破壊・環境破壊だ。今の日本の技術力・経済力を持ってすれば、少々のおおきさの山の形ぐらいいは一変できる、大規模な山々の緑を取り払い、土や岩を削って形を変えていくぐらいいは簡単なことだ。そんな影響だと思うが、少し雨が降るだけで、いつも行く安威川の水量がどっと増え、みるみるうちに濁流が、いつも走っている河川敷の遊歩道に溢れてくる。信州などの山間部の鉄砲水ほどには迫力はないがじわりじわりと水量が増え、往路ではまだ下のほうにあった水が、帰るときには河川敷に入り込み「これはやばい」と土手の上に這い上ったこともあった。

先週は槍ヶ岳に行くつもりだったが雨の予報で早々に中止にしたが、今回はせっかくの機会、またとない機会「雨でも決行しよう」と知恵を絞った。当初の計画ではバスセンターから2時間弱歩いて横尾まで行きそこでテントを張るつもりだった。しかし天気予報は50%以上の降水確率、曇りと傘マークが交互に出ている。おそらくこの様子では標高1500メートルの上高地では雨が降り続くだろう、そんな中でのテント泊はつらい。上高地のバスセンターから少し行ったところに“小梨”というサイトがあり、キャンプ場とバンガローがある、電話をすると雨が続くのか、日曜日ということなのか、“ケビン”という名のバンガローが空いていたので予約を入れた。寝具・調理器具・ガス・コンロ・炊飯器・照明・TVまでそろっている。別売りの灯油を買えばストーブも利用できる。目の悪いPちゃんのためにトイレつきの棟を借り3人で16500円なり。バス代が3人で6150円、駐車料金が2日間で1200円なり。

1泊だけなら時間が惜しいということで前日の夜8:00時に茨木を出発、京都在住のBちゃんを乗せ京都東ICから一路上高地を目指した。夜1:00ごろに“ひるがの高原SA”に到着。ここで寝ましょうということで狭い車内、冷えたビールに梅酒、おにぎりにサラダにコロケといろいろ出てきて、朝の7時までぐっすり寝た。前から気になっていた“ひるがの高原”という名前、調べると“蛭が野”であった、湿地であったのか蛭が多かったのか定かではないが蛭という漢字ではよろしくないということでひらがな表記にしたのだろう。最近では鹿が増えすぎた所為かどうかはわからないが山蛭が増えてきているようで、「あそこの山は 大丈夫？」という会話が聞かれるようになってきた。長い間、山をうろうろしてきたが、去年初めて蛭を見た、滋賀県：湖東の霊仙に登ろうと車を止め着替えを済まし歩き始めると登山口に犬を連れた登山のヒトがけたたましく降りてきた「蛭」「蛭がいっぱい ここはあかん」とヒトも犬も悲壮な様子、犬の毛の中にたくさん入り込んでいるようだ、ヒトも腕や腹をかまれている、ぞっとして足元の草むらを見るとたくさんの蛭が頭をもたげている「これは あかん」と急いで車に帰り、別の山に変えようと出発した。話は脱線したがアカンダナ駐車場に到着、シャトルバスに乗り換え上高地バスセンターに付いたのが10時ころ「まずは受付」と小梨キャンプ場に行くと「もう使ってもらっていいですよ」と10:30にケビンの扉を開けた。ここでまた気になる名前“あかんだな”を調べると“赤棚”が語源、後ろに火山でできた山があり、頂上の岩が赤く棚のようにになっていることからその名前ができたらしいが、これまた“あかんだな”とひらがなが使用されている。

雨は午後からと思っていたが10時ころから降りだした。傘をさしてケビンに、荷の整理、昼食の用意、湯を沸かしコーヒーを、ポタージュスープを、パンにリンゴとおいしく食べた。午後は「上に行こうか 下に行こうか」「今日の午後は 下のほう 大正池まで歩こう 晩飯までの4時間ぐらいい」「明日の午前中は 上のほうに 明神池方面を散策 昼ごろのバスに乗れば 遅い夕方には帰りつける」雨具と傘を持って歩き出した。夜は持参のすき焼き、ネギ・菜っ葉・しいたけ・糸こんにゃく・豆腐・牛肉を砂糖醤油で甘辛く炊く、持参のビールで乾杯、ペットボトルに詰めた白ワインに梅酒、旨い晩飯を食って温かく就寝、雨は勢いよく降っている。

雨の上高地、大阪を出てくるときは半そでシャツ、アトリエではシャツも要らない裸状態で汗が滲んでいた、ここに来ると長袖シャツにヤッケを着込み傘をさして歩いている。北風ピーパーを思えばまだ暖かい。大きな木、針葉樹がよきよき広葉樹もある。クマザサが繁り薄暗い森の中、土の道、下を水が流れるきれいに整備された木道。

説明版：上高地はいくつかの沢から大量の砂礫が供給され盛り上がった地形がたくさんあるそうだ。解説氏そうおっしゃるが、100年も経てば今の姿が「影も形もない」というようになっていくかもしれないね、自然の力で。絵葉書で上高地の象徴“立ち枯れの木”を水の中に発見。水の側で傘を持って上へ飛んでいる写真を撮った。焼岳は雲の中で見えないのが残念。1915年噴火による泥流で梓川がせき止められ大正池ができた、噴気が今も続くと記してある。

説明版：河畔はヤナギ・ハンノキ。湿性林はサワグルミ・ハンノキ。針葉樹林帯はカラマツ・シラビソ・トウヒ

説明版：1週間前クマ発見の文字。目を合わせない、あわてて逃げないとも書かれている。クマ君たっしやでね。

シラカンバとダテカンバ この辺りにあるのはシラカンバ：木肌が白い。ダテカンバは木肌がやや赤みをおび、山腹か上のほうに生育している。シラカバと呼んでいたが、シラカンバが正式名称らしい。どちらも山ではきれいだ。

説明版：鳥類 アカゲラ・コガラ・コマドリ・ルリビタキ・ウグイス・カモ 100種以上が確認されているそうだ。ただ花・樹木・鳥・昆虫と数々の固有種を見聞きするが、右から左状態ですぐに忘れてしまう。ひとたび覚えてしまうと逆に「これは〇〇だ」言い過ぎ皆様から嫌われるかもしれないと負け惜しみの一言も。

説明版：カラマツ ここでは天然に生育している。八ヶ岳、南アルプスに行くとカラマツが植林されぐんぐん伸びている。秋には黄金色に黄葉しそれはもうきれいですよ、圧倒されますよ。

説明版：正面が涸沢岳、その奥が日本で3番めにたかい奥穂高岳、左から西穂・奥穂・涸沢・前穂・明神と山の名前が書いてある。これらの山は硬い火山岩で形成されているので、激しい浸食作用に耐え、尖った峰や断崖絶壁の山容になっている、と書かれているがここの登山は危険度が高い。奥穂・前穂は行きました。涸沢のキャンプ場で1泊して朝に出発、奥穂・前穂に着いたがお盆の季節、ヒトが多すぎ「下ろうか」と白出まで下った、2年ぐらい前の話、テントを担いでよくまあ歩いた、疲れ果て、林道でテントを張ってラーメンを食べ寝た。澤山さんと二人だった。

大正池から帰途に雨がどんどん降ってきた、梓川の水量もやや増えたかな「それにしてもこの川の水はきれいだ下の岩が透き通って見える」向こうの木々は黒く見えるがその向こうは霞んでいる、上のほうの山は全く見えない、墨絵の世界“与謝蕪村”だ。暗い森に白い花、ナスビ大（サラシナショウナというらしい）がふた房。

赤沼千尋：登山家・燕山荘（1921年）の創始者：あのがっしりとした 硬い峯の岩石が、烈々と陽に燃え やがてばら色に移り ついに陽炎のごとくゆらめいて消え去ろうとする時 峯をささえた谷々は 暗く静まって・・

今西錦司：山は泰然としている 毅然としている 超然としている 山はどうみても巨人である このようにたやすく擬人化できるところに 海にはない山の魅力がある

伊藤周五郎：故郷は氷河に削られた山頂のカール はずけ親は風だ 天の影 地のうなり カールをとりかこむ垂直の絶壁 そこでは時には質量は消え 時間が停止する

翌朝、やはり小雨が降っている。昨日の4時間の雨のなかの散策、靴の中はおおいに濡れている、「このまま はこう あと半日もすれば 車にもどれる 乾いた服も 乾いた靴も まっている」形は登山靴なれど、底はつるつる、水溜りに入るとすぐに浸水、情けないやつだけれども捨てるにはしのびないとはいってきた。思い出すのが大嶺奥駆道を歩いたときもこの靴、防水が効いていない、1日目の雨で中は水びたし、後の6日間の不快さは大きな声では言えないが「困惑の極み くさい」であった。「明神まで 歩こう」と進んだ。1時間ほどするとやや高度が上がってきたのか、紅葉といっても黄色、まだまだ9月の1週目なのに黄色くなった葉っぱが見られるとはさすがに信州だ。暗く生い茂った森の中に太い木がたくさんある、自然そのままという森に手をいっぱい広げた幅の木がそれより太いものもあちこちにある、原生林の森は美しい。明神池には鳥居があるお宮さんがある、何度か通っていたが振り向きもしなかった。登山客がどんどん下ってくる、朝なので横尾が徳沢あたりの小屋で泊まったのかもしれないが、この雨の中をよくも無事に降りてこられたが、皆さん天気が悪いときは無理・無茶をしてはいけませんぞ。

会場飾り付けをすませました。来廊お礼 2015年9月 茨木市立川端康成文学館ギャラリー 岡村隆久

今年の夏は暑い日が続き、それでなくても「夏暖かく 冬涼しい わがアトリエ」何日かは仕事にならず、グタリと寝そべっていました。8月半ばが過ぎたところから、今度は雨。梅雨の季節のような雨の日が続き、涼しくなったのはありがたいが「ちょっとおかしな 気候」が続きますね、最近はおかしいですねえ。

よわい68歳「ほんまかいな」というようなじじいになりました。「これからは 絵を描くことと 山を登ること だけしか しないぞ」と決め、ほとんどアトリエにこもりっきりの日々、たまに近所のおだやかな山、時にはアルプス1万尺に登っています。電車に乗らず、TVもみず、たまにみなさまとお会いすると嬉しいかぎりです。

アトリエにこもりっきりで絵をながめる日々を過ごしていると、今まで気づかなかった思考やら方法やらが次々浮かびます。また20年前30年前の過去の絵を引っ張り出すと、当時を思い出し、再びそのときの精神状態が、戻りはしませんがかすめます。そんなこんなで「まだまだ 描きたい」という日々を過ごしています。

山登りも「食料持参 テント泊」と決め、いくつかの山を楽しんでいます。「あと何年 山に登れるか」と問いつつ体力維持に努めております。「もう一度 槍ヶ岳に」と先日計画をしましたが、雨で流れ、秋に再挑戦の予定です。最近、ごく親しい二人の仲間を亡くし、「せおっていくぞ」と楽しむことができます。

茨木市での展覧会は久しぶりです。40歳50歳代は<ぎゃらりー壺>で毎年展覧会をさせていただきました。阪急茨木駅構内<ロサヴィア:市立ギャラリー>でも何度か展覧会をさせていただきました。私は「展覧会だぞ」といわれると、「描かねば」「いい絵を 描かくぞ」と積極的になるほうなので、何度も展覧会をしてきました。「君の絵は もう OO 回みている やっと なれてきた わかりかけてきた」という方が多いようで、「この絵は わからん」といいつつも 何度もみていただいています。「わからなくても いいじゃないですか 色と形を楽しんでください」わたしも人生の晩年になりましたがこれからもよろしく願います。

W260xH130cm mixed materials on canvas 070715-120

この絵は「さあ 展覧会のために 描くぞ」と描きはじめました。ところがなかなかうまく進みません。思い込み、気の入れようが過ぎると、物事がすなおに進まないという典型なのかもしれないと思いつつ、次の日もまた次の日もと手を加え続けました。「ええい 赤をいれてみよう」と思い切りました。なんと、うまいぐあいにできあがりました。

W117xH91cm mixed materials on canvas 090615-50

展覧会の案内状は、展覧会は始まる2カ月ぐらい前には、できてなければいけません。案内状に載せる絵の写真は、相当前に用意しなければいけない。「展覧会の直前まで 筆を入れていました まだ絵の具が 乾いていません」というような絵は載せられません。

W146xH91cm mixed materials on canvas 280815-60

絵の具の話。絵の具屋さんには、100色を超える色が並んでいます。わがアトリエには何色あるかな。20色ぐらいはあるかな、でも、いつも使う色は10色ぐらいです。この絵は最初に紫色のチューブを絞り、赤、青、黒、白と順番までわかるくらいに簡単に、しかも単純に、そして素直に、できあがりました。こういうできあがり方は嬉しいかぎり、乾杯である。

中西プロの真似をして、撮りましたが、やはり写真は下手ですねえ。

15-062 展覧会Ⅱ 170915

W146xH91cm mixed materials on canvas 280815-60

絵の具の話。絵の具屋さんには、100色を超える色が並んでいます。わがアトリエには何色あるかな。20色ぐらいはあるかな、でも、いつも使う色は10色ぐらいです。この絵は最初に紫色のチューブを絞り、赤、青、黒、白と順番までわかるくらいに簡単に、しかも単純に、そして素直に、できあがりました。こういうできあがり方は嬉しいかぎり、乾杯である。

W122xH73cm mixed materials on canvas 140215-40

「いい絵とはなんですか」よく聞かれます。「絵は、いい絵でないとだめですぞ」これは私の常套句。うまい絵も、きれいな絵も、高く売れる絵も、みんなだめ。「素直に こびもなく 化粧のための化粧もない」そんな絵がいいのだ。とはいうものの、いい絵なんてわが生涯で、なん点、描けるかな。

W60xH86cm mixed materials on canvas 030315-25

二十歳のころ、皆様ご存知、明治の画家“青木繁作<海の幸>”を何度も、みに通いました。5人ぐらいが右に向かって歩いていると思いこんでいたが、今、あらためてみると10人ぐらいの裸像が左に向かって行進している。残念ながら、もう当時の感動はないが、ヒトが行進する構図の絵は何枚か描いた、海の幸のまねをして描いた。この絵はひとりが右に向かって走っているさまを描いています。

W73xH61cm mixed materials on canvas 130415-20

ピアノを弾いているヒトの絵です。画面中央にヒトの顔のような手のような線が走っています。下部には、白黒の鍵盤が並んでいます。私の絵は具象絵画ですが、具象の形が頭の中でこの絵のように分解・崩壊しています。いってみればいつもずっとこの分解・崩壊を楽しんでいます。「君の頭はどうなっているのだ」「きわめて正常です」

W130xH73cm mixed materials on canvas 140215-40

色といえば、わたしは赤・青・黄・緑・紫ぐらいかなと思っています。ヒトによっては、三原色しかない、中間色がたくさんある、四色だ、といろいろいわれます。私の絵はこの5色に白と黒がくわわります。赤は好きな色ですが、赤にもいろいろあり「ちょっと赤い」「ちょっと渋い」「もっと赤い」なんて描きながらつぶやいています。

W60xH86cm mixed materials on canvas 310815-25

描きはじめた当初はよかったが、だんだん悪くなってきた「悪あがきは いけない」と思いつつ、絵がにごってきた。これはいけないと、高価な魔法の絵の具を使ってみた、これでよしでいいかな。「そんなもの あるの」「魔法の絵の具あるよ・・」いつも聞かれますが、絵の数字は、できあがった日付を日・月・年であらわしています。最後の数字は大きさ、号数です。

W73xH91cm mixed materials on canvas 120900-60

15年前に描いた絵をだして、加筆した。せつかくのいいものを、つぶしてしまったかもしれない。ものを造るヒトにとって「今が一番いい 今が一番だいじ」ということで・・。絵ができあがると、いまだに、フィルムカメラで撮影しています。「デジタルでいいのに」と中西カメラマンに笑われます。

W91xH73cm mixed materials on canvas 111114-30

実はこの絵、内緒にしておきたいが、一気に描き上げた絵です。一気に描き上げるなんて、怖くてできないが、これで終えた。話は飛びますが、大昔の中国で、宇宙の話語っていた御仁がおられます。巨大な鳥が、地球規模の距離を、飛んでいく。時間も空間も超え、いきたいところへ、いきたいときに、いく。これはいいねえ、こういう考えは、今が楽しくなる。

Figure : 襤褸 (らんる) くん

ボロ人形を造りだしてもう何年にもなる。当初は「なにこれ」「こどもが作ったの」と眉をひそめられていたが、ひとりふたり「おもしろい」「いいねえ」というヒトもあらわれた。先日亡くなった同年輩の友人が二十歳のころ「襤褸」という言葉をつぶやいていた。漢字を見て難しいのにびっくりした、今でも書けないがその響きをいただいた。彼らがアトリエにごろごろいる。何をしているのやら、何をはなしているのやらわからないが、にぎやかにおいでになる。

D・G・Haskell ハスケル著<ミクロの森>科学読み物・生物読み物、この手の本は「知らなかった オレは 無知だねえ」の連続「知らないのは おまえさんだけ」と笑われようがわくわくしながら読んでしまう。以前、牛の解体の話、解体職人の著者が書いていた本を夢中で読んだ「なんだかこの仕事は 自分にあっている」と職探して始めた牛の解体現場、刃物の使い方、身体の動かし方、皮のはぎ方、肉の重み、どんどんわかってベテラン職人になっていく様が生き生き書かれていた。「牛は 大きな身体 すごいパワーを持っている」「草を食うだけで あの身体 あのパワー がでるのか 不思議だ」牛は草やワラを一日中クシャクシャ噛んでいるが、草やワラが栄養になるのかと素朴に不思議に思っていた。それに反して肉食生物が「がぶり」と肉にかぶりつく「あれでこそハイパワー」と思っていた。「牛も象もハイパワーだけどね・・・」解体先生の本に「牛は胃に バクテリアを 飼っている 草を食うとバクテリアが急増する 胃がそれを吸収する 栄養満点である」と書いてあった、胃に流し込まれた草、すり潰され、細かくされ、唾液でどろどろになったモノがバクテリアの栄養源、それを食ってバクテリアが大増殖、牛は大増殖した大量のバクテリアを栄養として吸収する。「草は牛の栄養源ではなく バクテリアの栄養源 牛はそのバクテリアを栄養にしている」と読んで「なるほどそうだったのか」「そういうことだったのか」と納得していた。

ハスケル先生：反芻動物の第一胃には特別の助っ人がいる。微生物とのパートナーシップによって植物細胞に閉じ込められていた膨大な備蓄エネルギーを利用することができる。一方ヒトをはじめ微生物と協定を結ばなかった動物は、やわらかい果実、消化のできる種子、動物の乳や肉しか食べられない。

第一胃のなかの微生物のほとんどが酸素のあるところでは生きられない。これらの微生物は今と全く異なる大気の中で進化した生物の末裔。地球に酸素が生まれたのが 25 億年前、光合成が行われるようになってから。酸素は化学反応性の高い危険な物質であるため、多くのそれまでの生物が姿を消し、あるいは身を隠さざるをえなかった。酸素嫌いのそれらの生物たちは今も、湖の底や地中深くに棲み酸素の無い環境でかろうじて生きている。ほかの生物は新しい酸素という汚染物質に順応し、問題を回避、毒性のある酸素を自分たちが都合よく使えるようにした。酸素を使った呼吸、それをヒトは受け継いだ。動物の消化器官の進化は嫌気性の避難民に隠れ家を提供した。酸素が来ればすぐに吸収する菌がいる、噛み砕かれた食物がとぎれなく供給される、という微生物にとっての天国。第一胃の機能があまりにみごとなので、最先端の実験器具をもつ科学者でさえ第一胃を再現すらできない。1ML(1センチ立法)の胃液に 200 種 1 兆個のバクテリアがいる、みごとな生物学的複雑性がある、未解明のものがまだまだある。5500 万年かかって第一胃は進化したようだ。専門的に呼ばれるルーメンとはホルモンのミノのことらしい。

第一胃を持つ反芻動物とはどれとどれ？ウシ、ヤギ、ヒツジ、シカ、キリン。酸素がすぐに化学反応を起こす危険物質とは驚きだねえ。ヒトと全く違う消化器官、バクテリアがいる活躍している、共生共存しているとは驚き。科学万能の時代にたかが牛の胃の中身が解明されていないとは、5500 万年かかった進化、不思議な思考が述べられた、常識当たり前だと思っていたことがひっくり返っている、ひっくり返ったほうが正解だとは、いやはやどうもの宇宙観。

先生、鳥の目の話もしている。「そらあ ヒトの目のほうが 鳥より いいにきまっている」なんて思っている無知なオレに教えてくれる。鳥の目はヒトの目よりたくさん色を認識することができる。ヒトは 3 種類の色覚受容体を持った目で見ているが、鳥の目は紫外線を感じする色覚受容体をプラスしてヒトには体験することはおろか想像するさえできないほどの広がりを持っている。1 億 5 千年前ヒトの先祖の哺乳類も鳥類も爬虫類から別れた。古代鳥類は爬虫類から四つの色覚受容体を受け継いだ。だがヒトの先祖の哺乳類は当時ネズミのような夜行性の生き物だった、闇の中に生きる動物にぜいたくな色彩は不必要だった。ほとんどの哺乳類は二つの色覚受容体しか持っていない、いくつかの霊長類だけが三つの色覚受容体を進化させた。想像もできない目の見え方、空も山も、草木も花も、他の鳥もえさも、あらゆるものがヒトには想像もできない見え方とは、絵を描くヒトにとってはほっておけない世界、反転の話、宇宙の話をもってして想像してみよう。とはいえ、どんなものなのでしょうね、わくわくしますねえ。

今は展覧会の真っ最中だけれど3日間も山に入った山に来てしまった。廃村八丁というロマンがあふれた名のついた山だ。ここは春にも来た、春は京都東ICから、途中、梅ノ木を通過して京都市左京区菅原というところから少し道をそれて駐車した。今回は能勢のほうから回るという「え？」千理中央から箕面トンネル、能勢で国道477号線に乗った。この国道は大阪府池田市と三重県四日市を結ぶ、しかもぐるりと回る、池田、能勢、南丹、途中、琵琶湖大橋、甲賀、四日市という道だとはじめて知った。前回の登山口は左京区だったが今回は右京区京北小塩というところから。右京と左京どうなっているのやら、京都市の北のほうに行くのと接している、御所から南を向いて左右ということらしい、廃村八丁の北は南丹市、東は滋賀県、どうもオレは土地勘の無い地理不案内の場所だったが改めて少しはわかりかけてきた。

○林道の終点手前で車を止め登山服に着替えた。2泊テントということで荷は重い、久しぶりの重い荷、小川の渡渉のあとは急な登り、帰りの下りは要注意という斜面、大汗をかいて「えっちら おっちら」登った。

○スギの植林地帯だが、このスギは手入れが行き届いている、枝がきれいに刈られ、地面は清掃され、間伐材もない「そうここは北山杉の産地かな 周山街道 京北町 その杉だ」スギの植林地帯が終わると小さい広場、そこに地蔵さんが祭られている。2対の地蔵には同じ模様の前垂れ、陶器の地蔵がその間に置かれその右側に丸く尖った石ころ、昔ここに顔が彫られていたのかそれともただの石ころか、いずれも可愛く並んでいる。先ほどからなにやら白いものが飛んでいる、灰でも虫でもないと思っていたが「たんぽぽのワタだ、たんぽぽがいっぱいだ」ここから上は自然林、地面が明るく、右へ左へ木々がはびこり、枯れ木も山の賑わいもあり若木もたくさん育っている。

○お地蔵さんから5分もいくと“ソトバ峠”地図を見るとこの後はなだらかに下っている「おや 林道が見える」

○鉄の機械、「ウインチかクレーンか」赤錆びて腐食しているのがほとんどだけれど、この物はまだまだ形を保っている。名盤にYANMERとかかかれている。山の男たちが働いたあと、ここには1升瓶は転がっていなかった。

○いよいよ近づいてきた前に見た景色、ザーザー5メートルぐらいの川、石ころ橋の石の上まで水が来ている「すべると やだね」おそろおそろ渡渉。電信柱ぐらいのトチノキの葉が茶色い、秋なのか土が削られ根が水にあらわれ枯れかけなのか、大雨が降ると蛇行する小川、激流が岩にぶつかり土を削りごろごろ石を積み上げる、そんな後かな。

○このあたりの岩は帯状の堆積岩、5センチ幅の帯がまっすぐ斜め、まっすぐ反対向きの斜め、曲がりくねり、川の底までその帯、魚が泳いでいる、まずはいっぱい「旨い水」ガラガラと水音のそばにテントを張った。

○廃村八丁、周りは小高い山、半分ぐらいしか空が見えない谷間の土地。立派な檜がによきによき。木を切って運び出すには赤字覚悟だそうで、これらの檜も自然林になりつつある。この谷間湿度は高い、じめじめした土地だろう、この湿気「じつは 嫌いなんだ」「空気が 乾いているほうが 好きだ」「山は 谷より尾根が 好きだ」

○「品谷山をぐるり1周」テント場横の川を横切り2M巾の谷を詰めていく。右へ左へ渡渉、濡れた岩、緑に光った岩、「すべると やばい」「濡れると 靴に水がもれる」「水に弱い登山靴は いけないねえ」「シラフもだ 起きると 濡れている」900グラムの上等なやつだが両方とも四半世紀前のもの、絵が売れたら買い換えよう。

○品谷峠で尾根に出てぐるり時計回りダンノ峠をめざす。鹿よけの網がある、傷み壊れている箇所もあるが網の中は緑ぼうぼう、自然林の山には巨大な木がいくつか、幹が太い、根が張っている、水を吸い上げている、ハイパワーを感じさせてくれる。「おおお できた すごいねえ トチノキ」一番のお気に入り、途中から葉の違う木まで寄生、シダも寄生、「でっかいねえ すごいねえ」神宿のもの静かな巨大さ、また会えましたね。

○陽の光でケタイなたんぽぽのワタ、新種のオオダニ、いやいや真っ黒な毛、まさか熊さん、たっしやでねえ。

○一日目に飲み過ぎた、二日目の晚餐はロング缶1本と日本酒コップ半分、鍋はキャベツ・しいたけ・うすあげ・にんじん・しめじ・たまねぎ・鶏ガラスープ・コショウ、薄味ながら旨い。野菜がうまいねえ。

○昨日夜「ピュー」鹿の声、ほんの近くで「ピー」ぎよっとする鋭さ。

○朝おきると7時。山また山の谷間、空は半分も無い、日はまだ照ってこない。80年前までは人家があった、いくつかの石垣が残っているが廃家の影も形も無い、住人のいない村。村長と称する好々爺がおられた、長逗留されるそう。オレはおちょこをひらった、昔の模様、しばらく飾っておこう。

